

まめ、とあるを始とす、此山づねに煙たちのぼるときは大焼なし、烟絶るときは、硫黄の氣、地中に
みちて大焼あり、此穴を釜となづく、巡り一里といへり、天明の大焼より穴深き事底を玄らず、日
本紀に、白鳳十四年三月、信濃國灰降、草木枯とあるは、其時此山大焼ありし故なるべし、中右記云、

○中右記文
在前故略

大焼の事、其後さだかに記せしものなし、或書曰、大永七年四月大焼、又享祿四年十一月二十二日
大雪降つもる事六七尺、二十七日大焼にて、麓二里程の間、石の降事雨のごとし、灰の降こと三十
里に及ぶ、二十九日大雨にて燒石を押し出し、麓の村々多く流失すといへり、今曠原に磊砢たる燒
石は、其時の漂出なるべし、正徳元年二月二十六日大焼、震動半日にして止む、灰の降事一寸、享保
八年七月二十日大焼何事なし、同十四年十月二十日、又大焼云々、此山煙絶、穴埋りて平地となる
事年あり、天明三年の春より烟たちのぼる事度々なりしが、五月二十六日大に煙立、中空に綿を
重るが如し、六月九日二十九日、又大に烟たづといへども、音はなし、七月朔日より次第につよく、
五日六日に至ては、黒煙天を覆ひ、震響百里に及び、八日、山破れて泥水發せし事は古今未曾有な
り。

〔信濃國淺間岳の記〕仁和三年七月三十日、大山頽崩、山河溢流、六郡之城廬拂地漂流、牛馬男女流死
成丘扶桑略記

按に、千曲川の變なるべし、佐久、小縣、埴科、更級、水内、高井、右六郡なり、天明三癸卯年迄、凡八百
九十八年、

應永三十四年丁未六月四日、富士と淺間山虹吹、四月より雨降つゝき、六月大洪水、川邊通大破、
永正十五戊寅七月、淺間山雪降、
大永七丁亥年四月、大焼砂石降、